

児童養護施設出身者の嘆き

都内一児童養護施設職員

児童養護施設の現状

現在の児童養護施設は、末期的な状態にある。虐待を受けても、その多くの受け皿となる一時保護所、施設は満員で受け入れることが出来ない状況にある。ここ数年それが変わらない。子どもの問題は多様化しているのに、変わらぬ配置基準等で苦慮している。

また、職員の動きも激しい。重労働、変則勤務、低賃金と長く勤める事が困難な職場であり、都内施設でも毎年100人前後が退職し、新任職員となる。

電話でのSOS

それは、突然の電話からはじまった。

平成21年1月4日、今年初めての宿直を終え、朝食を施設の子どもたちとのんびり朝食を済ませ、勤務を終了し、一日をどう過ごすか考えている時に携帯電話がなった。

「先生、俺だよ、分かるかな？覚えているかな・・・」

かすかに聞き覚えのある声であったが、すぐに思い出す事は出来なかった。電話の主は、十何年前に知り合った、他県の児童養護施設出身者であった。

彼のことを思い出すと、「また、東京に出てきたんだ、首になって、派遣村に行きたいが場所がわからないし、自信もないので一緒に行ってくれないか」と切り出された。

私は、居場所を確認し、待ち合わせをして一緒に行動した。

彼との出会い

彼との出会いは、全国の児童養護施設の高校生が集まり、様々な活動を通し、お互いを理解し合い、励まし合い、施設の事を子ども自身が話し合うという「高校生交流会」という場所であった。

各都道府県の施設の子どもたちが、各グループに分かれ、様々な問題を議論する。小遣いの事や施設の規則など、様々な事が議論されていた。私は、アシスタントとして参加し、同じグループになり、意見を交換した高校生であった。

しっかりとした事を考えている高校生や、遊び半分の高校生もいた。彼の参加動機は、彼女が出来ればいいかなという単純なものだった。

ただ、はじめの動機が遊び半分であったが、施設によって異なる規則、都道府県によって異なる

小遣いの格差に、彼は目的を忘れ、活発に意見を交換し、施設を変えるのにはどうしたらよいか真剣に悩み、考え、我々職員と対等に意見を交わしたのである。

交流会の期間が終了するころ、お互いの施設の住所を交換し、施設に戻っても、時々手紙などで情報交換をしていた。

突然の電話

実は、彼の突然の電話は、今回がはじめてではない。2回目である。

高校を卒業し、彼は施設の職員の紹介で、工場に就職をする。児童養護施設の高校生は、卒業と同時にほとんどが就職し、施設を退園する。進学する事は難しい状況にある。

就職し、順調に働いていると連絡があったのは、夏ごろまでで、その後連絡が途絶え、いつしか私の手紙が、宛先不明で戻ってきて、彼の出身施設に確認しても所在がつかめなくなっていた。

1年ほどして、突然、私の携帯が鳴り、彼が東京に出て来て仕事をしていることが分かる。

仕事をし、自立した生活を送っていたが、一人での生活になじめず、工場の人間関係になじめず、施設の職員に相談できず、突然仕事を辞めてしまい、東京だったら働く場所があると思いついてきたという。高校時代の友人を頼り出てきていた。

東京での彼は、建設現場で働き、その現場で生活をしていた。給料など余裕ができたので、私の事を思い出し連絡をくれたのだ。再会をはたし、何回か会って相談にのっていたが、東京の人ごみにつかれ、2年後には、故郷の施設を再び頼り、戻っていった。

戻ったら、すぐに連絡をくれた。仕事はすぐに見つかり、工場の仕事で寮付きであった。ただし正規社員でなく、派遣社員だった。その後は、再び順調に連絡を取り合うようになった。

派遣村へ

電話をかけてきたとき、新宿にいた彼と駅で待ち合わせをし、日比谷公園を目指しながら、道中、今回のいきさつを聞いた。

12月中旬に、派遣という事で切られ、切られたとたん3日以内に退寮も告げられた。退職の通告は2週間前であったという。その工場でも何十人の派遣社員が切られ、その半分以上が、児童養護施設出身者であったという。

切られた後、地元の職安や出身施設の職員に相談したが仕事が見つからず、途方に暮れていて、また東京に出て来たという。あてもなく東京に来て、ネットカフェで年末を過ごし、ネットのニュースで派遣村の存在を知ったという。

貯金の貯えもあったが、たった半月のネットカフェなどでの生活で、貯金に底が見えつつあり、携帯電話の解約も考えたところで、私にSOSを発信したという。

派遣村で新たな驚き

派遣村につき、手続きを見とどけ、行き先など必ず連絡をするように伝え、彼と別れた私に、顔見知りの弁護士が目の前に立っていた。

派遣村での状況を教えて頂き、その弁護士のグループは、生活状況を支えるため生活保護の申請をしているというのである。気付くと、長蛇の列は、その申請手続きのものであった。

私は、即ボランティアを申し出た。

派遣村の人々が、全て派遣切りであった人ではなく、中には、明らかに浮浪者である人もいたが、そこでのボランティアの人々は、分け隔てなく、同じく対応をし、多くの人が保護を申請し、生活基盤を作り、自立を目指す事で動いているように感じ、片付けまでお手伝いとなる。

派遣という職種

世の中が、派遣切りという文句が出始めた昨年末、私の施設の出身者でも、派遣切りにあってしまった卒園生がいた。数人はいる。

他の施設の職員からも、卒園生たちが切られていると話があった。

派遣村で、百人以上の人の話を聞いたが、児童養護施設出身者が多くいた、なぜであろう。

答えは明確である。親に恵まれずに、施設で育ち、巣立って行く。その際、社会に出る時に、保証人という壁がある。

高校を卒業して、すぐには、その施設の園長等が、会社契約の保証人になったり、アパートなどの契約も同じくおこなうことができる。ただ、残念ながら、離職をし、再就職をしたり、アパートなどの転居となると保証人が壁となって立ちばかる。

そこで、保証人もなく住み込みですぐに仕事出来る派遣に目先が向いてしまうのである。

施設出身者の自立

20歳までいられる根拠がありながら、18歳、高校卒業と同時に、施設を退園しなければならないのが現状である。しかも、家庭の子は、大学や専門学校への進学という道に進む子が多いのに対し、高校卒業をしたらすぐに就職という道を資金的な面から選ぶ事を余儀なくされる場合が多い。

私を派遣村に導いてくれた彼は、成績はトップクラスであった。県立のトップクラスであれば大学進学も考えられ、実際に彼の友人たちは、ほとんど大学等に進学をした。彼も、お金さえあれば進学を考えたというが、家にはお金もなく、施設が負担する余裕もなく、就職の道を仕方なく進まなければならなかった。

高校在学中から資金を貯め、奨学金制度などを得て進学している子どもおり、奨学金制度がだいぶ充実してきているものの、生活する場と生活費を考えると、安易に進学を進める事が出来ない施設職員の悩みもある。救いたくても無理がある。

自立の為のサポート体制も、改善点を多く抱えている。

児童養護施設にいる子どもたちの多くは、何らかの虐待を受けていたと言われている。受け皿として、子どもたちを健やかに育てていく努力は惜しまないが、施設をでなくてはならない年齢になった時に、その後の進学体制等や、サポートする体制が未だ確立されていない面が多くあり、早急に整備し、確立されていく事を望む。

終わりに

今回、実名を出さず、一児童養護施設職員とだけ名乗ることをお許しください。人物の特定はできないように記述したつもりですが、表記されている「彼」とその後連絡が取れず、今回の記述の同意が得られないままにあるためです。

またいつか、彼の事です、突然連絡が来る事を願っていますが、彼の同意が得られるまで匿名でいる事をお許しください。